

初景色

山田真砂年

野を山を日は渡りゆき葛の花
邪氣祓ふ一陣の風葛の花
葛の花富嶽かすれてなほ大き
白粉花の朝はつんつんしてゐたり
富士隠す雲に音なし秋渴
コスモスのゆれて空気のかるくなる
雨戸開く音の遙かや柁の実
二人して独り言いふ秋彼岸
ゐのこづちづかづか踏んで通りけり
峡の田や案山子一人は素っ気なし
ご近所はみんな元氣や芋の露
椋鳥の群ゆあんとゆれて日暮れけり
諸ほくほく食うてなんにも考へず
団栗に琥珀の艶や黄昏るる
ラフランス裸婦のごとくに剥かれけり
時雨るるや背をまるくして神の前
皺くちやの千円札やおでん食ふ
蜜柑の香させて来客迎へけり
我が町は海を真中に初景色
初富士を拝みにちよつと息切らす